「泓（ワイ）澄（タイ）」考

沼本克明

一、序

弘法大師空海撰の「文鏡秘府論」の訓点資料は、現存諸本全て漢音が使用されている。代表的な一本である「図書寮本保延四年点」の字音については、柏谷嘉弘氏によってその全例が分韻表に整理されている。(注1) それによると、漢音で読まれながらも、若干の疑問となる字音形が出現しているが、その疑問例の大部分は、この種の訓点資料の常として、旧系字音である呉音の混入及び形声音符に基く類推音（所謂百姓読み）として処理出来るものである。但し、中にその様な例として説明出来ないものが残る。

その一つに、一字音語の次の二字が有る。

耕韻合口　泓澄（ワイ）（地82）
庚韻直音開口　泓澄（タイ）

耕韻合口字の「泓」を「ワイ」、庚韻直音開口字の「澄」を「タイ」と読んだものである。漢音の通例から言えば、右二字の漢音形はそれぞれ「ワウ」「タウ」とあるはずである。なお「澄」字には中国側の字書、韻書に、別に蒸韻の反切が示してあり、それに対応して日本字音にも「チョウ」の字音形が存在し、実際の出現用例はこの方が優勢である。

従って、「文鏡秘府論」の古点本が通例漢音に基いて訓読してあることに従えば、この「泓澄」という字音語も、当然「泓澄（ワウタウ）」乃至「泓澄（ワウチヨウ）」とあるべきはずである。然し実際には右に見る様に「泓澄（ワイタイ）」となっていて、-ワ 韻尾に相当する部分が「ーイ」となった特異な形が出現している。この形は呉音の混入としても、或いは形声音符による類推音形としても説明することは不可能である。

本稿は、この「泓澄（ワイタイ）」という字音語形の出現の理由を探り、関連する諸問題について私見を加えようとするものである。

二、中国側における登録音形

まず始めに、「泓」「澄」二字について、「ワイ」「タイ」という仮名音形が導き出される可能性の有る反切が中国側に存在しなかったかどうかを確認しておく必要が有る。(注2) そこで中国側の字書・韻書・音義の登録音にどの様なものが有ったかを見ると次の如くである。

○切韻系韻書

①十韻彙編所収「切三」（王一・王二も同じ）

泓 水深烏宏反（耕韻平声）
根 直庚反……澄 水清（庚韻平声）
澄 清直陵反（蒸韻平声）

②大宗重修広韻

泓水深也烏宏切（耕韻平声）

根直庚切……澄水清定又音懲（庚韻平声）

澂清也直隗切……澄同上（蒸韻平声）

。玉篇系

①篆隷万象名義

泓烏宏反清深（耕韻平声）

澂直隗反清湛澂同上澄同上（蒸韻平声）

②大広益会玉篇

泓於耕切水流也（耕韻平声）

澂直隗切清也澂澄並同上（蒸韻平声）

。玄応一切経音義

底泓一宏反……（巻五）の他に同反切二例（耕韻平声）

澄（用例無し）

以上の切韻系韻書・玉篇系字書（注3）・玄応一切経音義は、我が国で奈良朝以来利用された三大典拠であったが、右に見る様に、いずれにも、「泓」に耕韻平声の一音、「澄」に庚韻平声及び蒸韻平声の二音、の他の音は登録されていない。

なお、念の為にその他の資料についてみると次の如くである。

。慧琳一切経音義

泓烏宏反（巻七）の他、擭宏反・一宏反・凡宏反・烏横反・烏萌反で全て耕韻合口。

澄長隗反（巻二）、直隗反（巻二）で共に蒸韻。

。集韻

泓烏宏切（耕韻平声）

根除庚切……澄（庚韻平声）

澂澄澄持隗切（蒸韻平声）

澄直稱切（蒸韻上声）

眙瞪澄懲切……澄（蒸韻去声）

。集韻には以上の五音が登録されている。

。唐代諸家音義（大島正二氏『唐代字音の研究』による）

泓於宏反（漢書音義）

泓烏萌反（後漢書音義）

泓烏宏反（晋書音義）

（耕韻平声）

澄沽魚反（文選音義）（蒸韻）

。龍龕手鑑

泓烏宏反（耕韻平声）

澄（掲出無し）

以上の様に、唐～宋代の字書・音義類においても同様であり、「ワイ」「タイ」の字音形が導き出される反切は登録されていない。なお、宋代の「集韻」には若干の他書に見られない字音が登載されているが、いずれも声調の分化したものであって、字音形は他と同じである。

これを要するに、我が国の呉音及び漢音に直接関係する中国中古音から秦音に至る反切においては、「泓」字には耕韻合口の字音――通例の呉音・漢音では「ワウ」の仮名書音形となるもの――のみ、「澄」字には庚韻直音開口の字音――通例の呉音・漢音では「タウ」の仮名書音形となるもの――と、蒸韻の字音――通例の呉音・漢音では共に「チョウ」の仮名書音形となるもの――との二音しか無かったと考えられ、「ワイ」「タイ」は反切によって作り出

された特殊な字音形の可能性は考えられないことになる。

三、「ワイ」「タイ」の特殊性とその源流

扨、先に、通例の呉音・漢音から考えると、「ワイ」「タイ」は特殊な形であると述べたのであるが、ここで、なぜそれが特殊なものになるのかを確認しておく必要が有る。

今、呉音との関係ついては一応切り離して考えられるので、以下、漢音との関係にしぼって、この点を簡単に示しておくこととする。

当面問題にしてる庚韻・耕韻の所属する梗摂の陽韻韻尾はやや前よりの硬口蓋調音（palatal）であったと推定されている。(注4) 秦音を母胎にした日本漢音では、梗摂諸韻尾を「ーイ」で転写していることはよく知られた事実であるが、これは中心母音と硬口蓋調音(注5)の[ŋ']とのとの間のわたり音を聞き取って転写した為と考えられる（対応する入声韻尾-k'）も「ーキ」で転写されている）。但し、日本漢音では、梗摂の全ての韻が「ーイ」で転写されているのではなく、その実情は中国音の直音と拗音の違いに応じて左の様にはっきり分かれている。

「泓」は耕韻直合口字、「澄」は庚韻直音開口字であるから、梗摂直音韻は「㋐ウ」表記という右の様な漢音の実態からは、それぞれ「ワウ」「タウ」でならない訳であるから、特殊な表記形ということになるのである。

では、この「㋐イ」という形はどの様な原因で生じた形なのであろうか。

下の表は、梗摂諸韻の仮名書形を大局的に把えたものであるが、

韻	音価	用例（注6）	仮名音形
庚韻	-æŋ	猛マウ 衡カウ 更カウ 行カウ 等	㋐ウ
	-ᵂæŋ	横クワウ 等	
	-iᵊŋ	明メイ 敬ケイ 英エイ 等	㋑イ
	-iᵂŋ	兄クエイ 永エイ 詠エイ 榮エイ 等	
耕韻	-æŋ	萌マウ 耕カウ 箏サウ 等	㋐ウ
	-ᵂæŋ	宏クワウ 等	
清韻	-iᵊŋ	名ヌイ 清セイ 成セイ 嬰エイ 等	㋑イ
	-iᵂŋ	傾ケイ 営エイ 穎エイ 等	
青韻	-ieŋ	寧ネイ 経ケイ 青セイ 霊レイ 等	㋑イ
	-iᵂeŋ	螢ケイ 熒ケイ 等	

韻	音価	仮名音形
庚	-ɐŋ́	①孟(マウ) ②行(カウ)鯁(カウ) 哽(カウ)衡(カウ) 秔(カウ) 羔(カウ) 孟(マウ) ③坑(カウ) 行(カウ)衡 彭(ハウ) 孟(マウ) ④羹(カウ) 更(カウ) 行(カウ) 荇(カウ) 衡(カウ) 彭(ハウ) 猛(マウ) 澄(タイ) ⑤行(カウ) 行(ケイ) 猛(マウ) ⑥庚(カウ) 彭(ハウ) 孟(マウ) 猛(マウ) ⑦行(カウ) 羹(カウ) 衡(カウ) 根(タウ) 彭(ハウ) 粳(カウ) 孟(マウ) ⑧庚(カウ) 鵬(カウ) 杭(カウ) 鯁(カウ) 亨(カウ)
	-ʷɐŋ́	②笙(セイ) ③生(セイ) ⑤生(セイ) 甥(セイ) ⑤牲(セイ) ⑦生(セイ) ⑧生(セイ) 猩(セイ) 猩(セイ) 甦(セイ)
耕	-æŋ́	①耕(カウ) ②萌(バウ)鏗(カウ) ③萌(マウ) 耕(カウ) 耿(カウ) ④ 萌(マウ) 耕(カウ) 鏗(カウ) ⑤鸚(カウ) ⑥萌(マウ) 耕(カウ) ⑦鏗(カウ) 倖(カウ) ⑧耕(カウ) 鶯(アウ) 譽(アイ)(アウ)
	-ʷɐŋ́	②横(クワウ) 鉉(クワウ) ③横(クワウ) ⑧獷(クワウ)

韻	音価	仮名音形
陌	-ɐḱ	②客(カク) 赫(カク) 陌(ハク) 魄(ハク) 澤(タク) ③伯(ハク) 柏(ハク) 白(ハク) 圻(セキ)(タク) 澤(タク) 客(カク) ④柏(ハク) 伯(ハク) 百(ハク) 拍(カク) 格(カク) 客(カク) ⑥挌(カク) 客(カク) 格(カク) 伯(ハク) 魄(ハク) ⑧伯(ハク) 鮑(ハク) 庀(タク)(釋) 粍(タク) 戟(カク) 峇(カク)
	-ʷɐḱ	③圻(セキ)(タク)
麦	-æḱ	②謫(テキ) 薛(ヘキ) 劇(カウ) ③麦(ハク) 謫(タク) 革(カク) 隔(カク) ④靂(ハク) 脉(ハク) 謫(タク) 革(カク) 劇(カク) ⑧鬲(カク)(韓)(ラク) 惟(カク) ②冊(サク) 賾(サク) 策(サク) ③
	-ʷɐḱ	③虎(カク)(クワク) ⑥虎(カク)(クワク)

	-ʷæŋ́
④箏(サウ) ⑤諍(セイ) ⑧崢(セイ)	②宏(クワウ) 紘(クワウ) 轟(クワウ) 轟(クワウ) 回(ケイ)(クワウ) ③宏(クワウ) 泓(ワイ)(クワウ) ④嶸(クワウ) ⑥閎(クワウ) ⑧閎(クワウ) 嶸(クワウ)

	-ʷæḱ
憤(サク) ④策(サク) ⑥策(サク) ⑧憤(サク)(セイ) 憇(サク) 冊(サン)	②畫(クワク) 馘(キク) ③幗(クワク) ④彏(クワク) ⑧馘(コク) 馘(コク) 畫(カク)

この問題を考えるには、もう少し庚韻・耕韻の実態を詳しく調査してみる必要が有りそうである。そこで当面の問題字を含む二韻の実例を集めて整理してみると次の様な結果を得る。

資料としたのは次の諸本である。①醍醐寺本法華経釈文平安後期点、②興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝（築島裕博士「興福寺本大慈恩寺三蔵法師古点の国語学的研究」による）、③蒙求長承三年点、④文鏡秘府論保延四年点（柏谷氏前引書による）、⑤仁和寺本孔雀経建久八年頃点、⑥高山寺本史記殷・周本紀建暦元年頃点、⑦論語建武康永点、⑧世尊寺本字鏡、（呉音形は原則として排除した）

左の表から次の様な点が知られる。第一は庚韻では歯音字とそれ以外で仮名書音形が異なる。歯音字は拗音相当の「㋑イ」、歯音字以外が「㋐ウ」である。庚韻合口字は「クワウ」で、歯音字は無い。対応する入声陌韻については歯音字が少なく明確ではないが、歯音字以外は「㋐ク」であり、㋐ウ↔㋐クと対応する。歯音字以外の合口字もクワウ↔クワクと対応している。第二に耕韻では、歯音字に一部「㋑イ」が出現するが、その他は全て「㋐ウ」であって、

庚韻と同様である。この歯音字の本来の形が拗音相当の「㋓イ」であるのか、「㋐ウ」であるのかは中国原音での所属字が少なく今後の検討を要する。耕韻合口字は「クワウ」である。この点も庚韻合口字が「クワウ」であるのと対応している。また入声麦韻は大部分「㋐ク」で、中に含まれる「㋓キ」は形声音符による類推音であろう（謫は別に謫と有る）。

なお、漢音の仮名書音形が「㋐ウ」対「㋓イ」、「㋐ク」対「㋓キ」に分かれるのは、前者が直音、後者が拗音という中国原音の違いが反映したものであるが、介母 i-j が中心母音の狭母音化を強めて韻尾 ŋ への渡り音も「ーイ」と聞き取られる度合が強かったためという音声的背景が考えられる。

以上の概観を行った上で、僅少ながら出現する異例の検討に入る。異例は

庚韻直音開口字の

行ケィ（仁和寺本孔雀経）

◎澄タイ

耕韻開口字の

嬰アイ（世尊寺本字鏡）

耕韻合口字の

◎泓ワイ

轟ケィ（クエイ）（興福寺本慈恩伝C点）

であり、これ等は、㋐ウ・クワウとなる主表記形の中に異例として出現するものである。◎印を加えた本稿で主題とする二字はそういうものの中に入るもので、全くの孤例ではないことになる。

扨、右の異例の中で、孔雀経の「行ケィ」は、この音形が、所謂新漢音を記載した資料群中に出現するので、恐らくそれの混入であろうと思う。

新漢音資料中の「行ケィ」の用例を若干例示してみると次の如くである。

①石山寺蔵金記院政期点

諸佛菩薩行願中

②石山寺蔵声明集院政期点

諸佛菩薩行願中

③東寺蔵佛説阿弥陀経宝永元年点

飯食経行行　此難事

④梵網経盧舎那仏説菩薩心地戒品慶応三年点（注5）

行菩薩道　及非道行嫁　六親行嫁

⑤法華懺法（大正蔵巻七十七所収本）

三乗行仏　下方上行　如説修行（以下全て「ケイ」）

右の様な実態によって、「行ケィ」という字音形は新漢音系統に属するものであると考えられる。

孔雀経字音直読資料に「行ケィ」が出現するのは、それの混入と考えられる。

今、孔雀経の便宜三種類の字音点について「行」の振仮名を調べてみると次の様になっている。

（仁和寺本）

山行處（巻中）

夜行羅刹女（巻中）

行不饒益（巻上）

（東大本）

山行處

夜行羅刹女

行不饒益

（国会図書館本）

山行處

夜行羅刹女

行不饒益

臆行龍王（巻上）　　臆行龍王
諸有浄行者（巻上）　　諸有浄行者
行路中（巻上）　　行路中
各各勤行（巻上）　　各各勤行

（以下中・下巻全て「カウ」）

右に見る様に、全ての「行」が「カウ」と読まれているのではなく、「ケイ」は僅少である。そしてそれ等は大旨諸本一定の個所に限って出現している。孔雀経の院政〜鎌倉期の諸本を調査してみると、もう一字「勝」について、新漢音形と判断される「シ」が出現しているが、この場合もやはり特定の個所にしか出現していない。(注9) 恐らく、院政期になると漢音も新漢音も共に真言宗における仏典読誦音として使用され、両音の読誦が教典の違いによって使い分けられる、その使い分けの過程で相互の混入が起ってしまったものであろう。

次に、「泓ワイ」「澄タイ」「譽アイ」は、「行ケイ」とは異なり、核母音をア列音で転写しながら、韻尾-ŋを「イ」で転写したものであって、原音の音声的背景が考えられる「行ケイ」とは別物であると考えるべきである。(注10)

ここで考えられるのが上代〜平安初期における漢字音の転写法(注11)である。日本漢字音の歴史上から見れば、平安初期まで（部分的には平安中期まで）の時代は、いかに仮名で転写するかの試行錯誤期であったと言える。従って、平安初期の文献には、出来るだけ原音に近い転写を試行しながらも、特に音韻として存在しなかった入声音や撥音韻尾・拗音の部分には音声転写の域を越えた表記が屢々出現している。例えば、

臆行龍王　　臆行龍王
諸有浄行者　　諸有浄行者
行路中　　行路中
各各勤行　　各各勤行

〔-ŋ〕
〔-ŋ′〕
- イ表記（痛ッイ 西大寺本最勝王経）
- ウ表記（綜ソウ 西大寺本最勝王経）
- オ表記（降カオ 阿毗達磨雑集論）
- 零表記（滂ハ 沙門勝道歴山瑩玄珠碑）
- 類音字表記（貢宮 地蔵十輪経）

〔-k〕
〔-k′〕
- キ表記（額カキ 一字頂輪王儀軌音義）
- ク表記（宿スク 西大寺本最勝王経）
- カ表記（斥サカ 瑜伽師地論）
- 類音字表記（殖色 阿毗達磨雑集論）

の如くである。当面問題にしている喉内撥音・同入声字について見れば、右のように velar の-ŋまでも「痛ッイ悩」の如く「イ」で表記している。また、palatal な-ŋに対応する入声-k′は漢音では先表に見た様に「ーク」が通則の形であるが、平安初期には「額ガキ」となった例が空海の一字頂輪王儀軌音義には出現している。「泓ワイ」「澄タイ」「譽アイ」は、こういう「痛ッイ」「額ガキ」などと同様の、院政期以後の漢音の通則形に合致しない上代〜平安初期の字音表記形の痕跡形と解釈されるものである。

扨、その様に解釈するとして、ではなぜそういう形が残存し得たのであろうか。日本漢字音史上から見ると、平安初期以前の字音形が後世へ引き継がれた場合は極めて稀で、「紫宸殿」等の場合は特異な例になる。「泓澄」が、いわば「取り残された」理由はどこにあったのであろうか。その理由を考える為に、次にこの音形の出現領域を調べてみることにする。

四、「泓」「澄」の出現領域

管見の及んだ諸資料についてみると、まず「文鏡秘府論」の訓点資料では、例外なく「泓澄」である（以下用例の声点・ヲコト点は省略）

- 図書寮本保延四年（一一三八）点（円堂点）
  泓澄（ワイタイ）沆瀁（カウヤウトシテ）（地巻・九意・水意）
- 高山寺本長寛三年（一一六五）点（円堂点）
  泓澄（ワイタイ）沆瀁（カウヤウトシテ）
- 成簀堂本鎌倉中期点（円堂点・一部喜多院点アリ）
  泓澄（ワイタイ）沆瀁（カウヤウトシテ）
- 六地蔵寺本室町中期点（仮名点）
  泓澄（ワイタイ）沆瀁（カウヤウタリ）
- 寛文貞享頃版本（仮名点）
  泓澄沈（タイ）（ママ）瀁

次に同じく「ワイタイ」という形が見えるのは「遍照発揮性霊集」の諸訓点本である。

- 東寺観智院本巻一院政期点（円堂点）
  泓澄（ワイタイシテ）（序）　泓澄（チョウ）（墨）（巻一）
- 応神紀裏書本巻一二院政期点（仮名点）
  泓澄（タイシテ）（序）　泓澄（ワイタイ）（巻一）
- 大東急記念文庫本治承三年（スミタ、フチ）移点（円堂点）
  泓澄（ワイタイシテ）（序）　泓澄（トシテ）（巻一）
- 六地蔵寺本南北朝期点（仮名点）（高野版）
  泓澄（ワイタイシテ）（序）　泓澄（ワイタイシテ）（巻一）　泓澄（ワイタイタリ）（巻二）
  六地蔵寺本の例の中、序の例の下欄には（ワウウトシテ、ウタウタリ）「泓於耘切水深也」「澄直庚切水清定也」

という書き込みが有る。これは高野版の本文の巻末釈音と同じものである。なお、この巻末釈音は高野版開版時に、宋本系五篇によって加え、五篇にないものを広韻系の一本によって補ったもので、大旨大広益会玉篇・大宋重修広韻の注文と一致する。六地蔵寺本の右側の仮名（原本には合点有り）が古い伝統的な形で、左側の「ワウタウ」は恐らく反切に基づいて造られた新しい読み方であろう。

扨、そうすると、性霊集の「泓澄」もやはり「ワイタイ」が伝統的な古い読み方であったことになる。なお筆者原本未見ながら、岩波古典文学大系『三教指帰・性霊集』による「醍醐寺本性霊集」（祖点は承安二年（一一七二）藤原敦周加点）もやはり「ワイタイ」の形で加点されている。

以上、今の所「ワイタイ」の形は空海撰述書の諸訓点資料（但し文鏡秘府論・性霊集以外には見出されなかった）にのみ見出される。

次に、以下、「泓」を「ワウ」、「澄」を「タウ」乃至「チョウ」と読んだ例を上げる。

◎古辞書・音義類の例

- 承暦本金光明最勝王経音義
  澄（チョウ）（八オ4、後筆者書入れ）
- 図書寮本類聚名義抄
  泓澄（上…東云烏宏萎冰反水勢也於宏反…魴云澄—深水皃也下宋云音懲真云又直庚…スマシム選真云チョウタウワウ）

右の注で注目せられるのは、東（東宮切韻）で「泓」に耕韻合口の反切の他に「萎冰反」という蒸韻合口の反切が示されている点である。この字音形は先に見た中国側の典拠には見当らなかったものである。東宮切韻は中国側の諸切韻を類聚したものであるから、切韻の一本にこの音が記載されていたことになる。次に仮名書音形に注目すると、注末「澄」字の真興の音注「チョウ」に

よって、呉音系字音が「チョウ」であったことが知られる。注の本文の「蔣魴切韻」中の「澄ー（泓）」に朱仮名音注が「平」「平」の位置に「タウ」「ワウ」と有る。朱音注は漢音系字音を示したものであるから、本書の加点者の漢音形が「澄泓」であったことが知られる。

- 天理本大般若経音義
  澄智与有スム（第三帖）
- 高山寺本新訳華厳経音義
  澄チヨウ直陵反（七オ2）
- 高山寺本貞元華厳経音義
  澄チヨウ（五オ4）（一五ウ2）
- 法華三大部難字記（承応二年刊本）
  澄スム キヨシ フカシ クラ サイギル（大正大学複製41頁）

以上は全て仏典読誦に使用された呉音系字音であり、「チョウ」（蒸韻形）の例ばかりである。

- 学習院大学本伊呂波字類抄
  澄浄チヨウセイ（二一・一〇四ウ2）

右の「チョウセイ」は漢音読漢語と考えられるから、日常漢語の「澄」字の字音形は漢音「チョウ」が一般的であったことを示すものであろう。

- 音訓篇立
  泓ワイ音ワウ音平 澄水浮也（天上・一冊四七オ5）
  澄チヨウ音 スミタ、ヘリ キヨシ スム（天上・一冊四七オ2）
  澄直陵反 キヨシ タ、ヨフ スム タ、フ（天上・一冊四六ウ2）
- 白河本字鏡集
  泓フカシ（第三巻）
  澄直陵反 キヨシ タ、ヨウ タウ スメリ スム（第三巻）
- 慶長十五年刊倭玉篇
  泓フカシ（中巻）
  澄スム（中巻）
- 亀田本下学集
  陶泓（器財門第十三）
- 文明十一年本下学集
  陶泓
- 易林本節用集
  清澄（寸部）
- 合類節用集
  泓又林ワウ同（巻一）

右の古字書類では「泓」（アウは訛形であろう）「澄」が主流である。「音訓篇立」に「泓」が見えるが、これについては後述。

◎訓点資料の例

- 石山寺本高僧伝序録長寛元年移点本（円堂点）
  康泓
- 久遠寺本本朝文粋
  澄ー清（巻三）
- 足利本六臣注文選
  泓ー汪洞 濃（巻十二）
- 寛文版六臣注文選
  泓ー汪洞ー濃（巻十二）

文選巻五呉都賦には「泓澄」が出現するが諸本振仮名が無く、音形は不明である。

（一四三五）

。六地蔵寺本江都督願文集永享七年頃点

澄　什林―遠之輩（巻一）

以上、訓点資料では「泓」「澄」のみ。

なお、字音直読資料としては

。安田八幡宮蔵大般若経鎌倉初期点

澄浄（巻一二八）

が有り、図書寮本名義抄真興音・天理本大般若経音義と対応して、大般若経呉音で「澄」が一般的であったことが知られる。

扨、以上我が国の仮名書音形の使用状況を見たのであるが、これ等の例を纏めてみると次の様なことが言える。

㊀「泓」「澄」を「ワイ」「タイ」と読むのは「泓澄」という熟語においてのみである。且、「ワイタイ」の読み方は「文鏡秘府論」及び「性霊集」に限定されると思われる。即ち、空海撰述書における伝統的な読み方であると思われる。ちなみに、空海関係の書の訓点本でも、「泓澄」という漢語以外では、この字音形が使用されなかったことは「続遍照発揮性霊集補闕抄巻第九」の次の例によって知られるであろう。

㊁、㊀以外の場合のうち、呉音系字音を主流とする仏典読誦音では、「澄」を「チョウ」と読む形が伝統的なものであったと考えられる。庚韻の「タウ」形は使用されていない。

㊂、㊀以外の場合の漢音を使用する場では「泓」を「ワウ」、「澄」を「タウ」乃至「チョウ」と読む形が使用されていた。図書寮本名義抄の朱音注に「澄泓」と有って、漢語形としても特殊な「ワイタイ」の形は使用されてはいなかったであろう。なお、「澄」の「タウ」形は極めて劣勢であり、漢音においてもこの形は反切による人為音形であったかも知れない。

以上の様な見通しを立てた段階で、次の様な例について触れておく必要がある。

。明衡往来（雲州往来）

享禄本　望二池水之泓澄一（注12）

書陵部本　〃　泓澄

群書類従本　〃　泓澄（注13）

書陵部本の読み方は文鏡秘府論及び性霊集と同じ読み方、群書類従本はそれ以外の一般的な字音形の読み方、享禄本は両者の折衷した読み方が行なわれている。明衡往来でのこの漢語の読み方はこの様に諸本で揺れているのである。明衡往来の諸本の訓点の系統がどうであるか、或いはそれ等の訓点が何時頃創始されたものであるか等についての詳細は不明であるが、一般的な読み方を採用したものの中に、空海撰述書での訓法「ワイタイ」が取り込まれ、一部では更にそれ等の折衷したものが出現することになったという過程が考えられる。

。音訓篇立

泓ワイ音ワウ音平

この「ワイ」は、音訓篇立（即ち祖本たる字鏡）が成立した当時、一般的に「ワウ」と併用されていたというものではなく、特定の典拠から引用されて出現したものと考える。特定の典拠とは、先述した所から真言宗の空海撰述書の訓法である。字鏡の撰者については未だ有力な手掛りは見出されていないが、築島裕博士は南都

法相宗などの伝統的な基盤の上に成立した可能性が大きいように思われるとされている。(注14) 字鏡の音注について見ると、相当の広がりのある典拠群を有していると見られる。(注15) 就中重要な点は、沖森卓也氏によって指摘されている(注1)様に、多くの訓点資料から引用転載された可能性が有るという点である。その引用された資料の一部に空海撰述書の訓点本が含まれており、この「泓」はその例であったのではないかと考える。

その様に考えると、字鏡にやはり特殊例として出現していた「譻」も同様な例として解釈出来る可能性が考えられて来る。

性霊集巻二所収の沙門勝道歴山水瑩玄珠碑の銘文の一部に次の様な部分が有る。

山也峰巢　水ノ也泓澄　綺花灼灼　異鳥嚶嚶

(訓点は六地蔵寺本による)

ここで注目されるのは、特殊表記となる「泓」「澄」「譻(嚶の異体字)」及び「峰」が固まって使用されている点である。

所で、この碑文には神護寺蔵平安初期(八〇〇年頃と推定される)加点本が伝存しており、次の様な訓点が加えられている。

山也峰巢(西兄)　水ノ也泓澄　綺花灼灼(テリ)　異鳥嚶嚶

右の神護寺本の「西兄」は仮名音形「セイクエイ」に相当する。従って、この部分の字音の読み方は、平安初期の「峰巢(セイクエイ)」から院政期以後の「峰巢(サウクワウ)」へと変化して行ったことになる。この平安初期の「セイクエイ」という字音形は、注6で言及した耕韻の漢音仮名遣いが本来は「(ア)ウ」ではなく「(エ)イ」であったことを示す確例である。また「クエイ」も、慈恩伝の「轟(ケイ)」が合拗音の直音表記であるとすると類例が存することになり、耕韻開・合両音の仮名遣いの通説を再考する必要が出て来ることになる。

扨、字鏡の「峰(セイ)」は、右の訓点本で言えば、古い平安初期の読み方に一致するものであることから、字鏡編者が依った訓点本は性霊集の平安初期点本と院政期以後の点本との中間過程にある一本であった可能性が考えられないであろうか。即ち次の様な三者の関係である。

○平安初期の訓法

峰巢(セイクエイ)　泓澄(ワイタイ)　嚶嚶(アイアイ)

○中間過程の訓法(字鏡の依拠本)

峰巢(セイクエイ)　泓澄(ワイタイ)　嚶嚶(アイアイ)

○院政期以後の訓法

峰巢(サウクワウ)　泓澄(ワイタイ)　嚶嚶(アウアウ)

院政期以後の訓点では「泓澄」のみが古い訓法を保存したもので、他は反切音(ちなみに高野版の巻末釈音には「峰(仕耕切)」「巢(戸萌切)」とある)に改変されてしまったと考える。

五、纒め

以上、本稿で述べた所を、主題に沿って纒めると次の加くである。

1、「泓澄(ワイタイ)」という字音形は「文鏡秘府論」「性霊集」の訓読に使用された特殊な語彙音形である。

2、若干の国書訓点資料や字書に出現する「泓澄(ワイタイ)」「泓(ワイ)」は1を典拠として生じた派生使用例である。

3、「泓澄(ワイタイ)」という字音形は、平安初期以前の字音表記形が真言宗空海撰述書の訓点のよみくせとして伝承されたものであろう。

六、〔付〕真言宗における空海撰述書の訓点

最後に、纒めの3で触れた「真言宗」という点について若干の補足を加えておきたいと思う。

真言宗における訓読の諸問題については、築島裕博士・三保忠夫氏・月本雅幸氏などによる研究が行なわれている。(注1) 築島裕博士は、大日経の古訓点について言えば、「平安中期以後、諸宗に学匠が輩出して、夫々に訓読を創始し、それが後資の間に伝承されて行った。その伝承は、時に忠実なものもあったが、時には粗なるものもあった。しかし異種の訓法を混合することは、天台宗には或いは若干存したかも知れないが、少くとも真言宗・広沢流などでは殆ど無かった」とされている。この指摘の中で特に注目したいのは、真言宗では特定の学匠が始めた訓法が忠実に伝承されて行くという伝統性が強固であったという点である。

月本雅幸氏は、特に空海撰述書について考察を進められ、これ等の訓点資料では平安中期までの訓点資料は非常に少ないこと、ヲコト点は天台宗所用のものは全く使用されていないこと、語法については平安前半期の状態を伝える古訓法は使用されていないこと、などを論証されている。更に、空海撰述書の円堂点加点資料の祖点については南岳房律師済暹（一〇二五～一一一五）である可能性を示唆されている。同氏の諸指摘の中で、本稿と最も関係して重要なのは、文鏡秘府論の諸本の一部を具体的に比較され、その加点が殆ど諸本一致し、系統を全く同じくするものであることを示されている点である。(注10)

扨、「泓澄（ワイタイ）」という読み方は、通例の訓点資料や字音点資料では考えられない特殊な形である。この特殊形は今の所確例としては文鏡秘府論・性霊集の院政初期の訓点から見られ始め、後に若干の国書訓点・字書に見られる。文鏡秘府論と性霊集の諸訓点資料は、多少反切音注に合致する形に改変されつつも、孰れもこの特殊な形を後々まで伝承している。その諸本を改めてヲコト点との関係で見ると全て円堂点（乃至仮名点）であって、(注11) 月本氏の説かれる通り全て真言宗広沢流の教学下に成立したものと考えられる（醍醐寺本性霊集のみ祖点は藤原敦周であるがこれも広沢流の訓点を下敷にして成立したものであろう）。

月本氏の説かれる様に、これ等訓点の祖点者が済暹であったとすれば、その加点の参考に平安初期以来の訓説が取られたと考えたい。神護寺本沙門勝道歴山瑩玄珠碑の訓点と院政期以後の訓点本と比較すれば、「峻嶸（セイクエイ）」が「サウクワウ」となっている等、両者は直接移点の関係にはないと考えられる。即ち、済暹が新たに訓点を創始したものと見て一向問題は無いのであるが、この「泓澄（ワイタイ）」の部分のみは平安初期形の伝存と考えられ、特殊なものではあったが、平安初期以来の真言宗のよみくせとして継承された部分と考える。それは教祖空海その人の訓説（注12）という意識に支えられたものであった可能性が考えられるであろう。

（注1）「図書寮本文鏡秘府論字音点」（「訓点語と訓点資料」第三十輯）

（注2）「泓澄（ワイタイ）」が反切によって導き出された人為音形としての漢音（又は呉音）ではないことを確認する為の作業である。

（注3）平安朝には原撰本系玉篇の完本が利用されていたが、現今逸文しか無く、本稿では「篆隷万象名義」で代用した。

（注4）河野六郎「朝鮮漢字音の研究」（『河野六郎著作集2』）

四三六頁参照。有坂秀世「漢字の朝鮮音について」（『国語音韻史の研究増補新版』）三二四頁参照。

（注5）注4の有坂論文参照。

（注6）本表における音価と用例について説明を加えておく。ここに示した音価は一応切韻の再構音として示されたカールグレンの説による。但し拗音介母は有坂・河野説に従い三等介母を-i-、四等介母を-i-で示す。日本漢音の母胎となった秦音では、本表の等位開合を等しくする庚韻と耕韻、清韻と青韻は合流していたと考えられる。日本漢音の仮名書音形ではそう考えて全く矛盾はない。

（注7）従来庚韻二等字は全て「アウ」形と考えられて来た。歯音字も、別音に拗音形の反切が有るものは別にして、笙・甥などの漢音形を「サウ」とし「セイ」は慣用音として取扱われていたが、訂正を要する。参考：岡本勲「日本漢字音に於る規範と事実—佳掛畫汰・牲甥等の字音を繞って—」（『国語国文』37巻7号）。なお、この岡本論文では触れられていないが、注6で述べた様に庚韻と耕韻は漢音の母胎音では合一していたと考えられるから、当然耕韻の歯音字も同様に考えられそうであって今後検証してみる必要がある。

（注8）頼惟勤「漢音の声明とその声調」（『言語研究』17・18合併号）の翻刻による。

（注9）孔雀経諸本では「無能勝龍」「毛毯馬勝龍王」「勝妙城」「難勝国」「勝乃大勝神」「勝財薬叉」の個有名詞のみに「勝」という新漢音形が使用されている。

（注10）拙稿「所謂新漢音資料としての「九方便」「五悔」の音読資料について」（『鎌倉時代語研究』第七輯）の中で、飯田利行博士が指摘された法華懺法の「猛バイ」について「（—イとなる）庚韻字の主母音は漢音新漢音共に大旨エ列音で出現するので、この「バイ」はその点特異なものであるが、「文鏡秘府論」の諸点に見られる「泓澄」も、あるいはこれに類するものとして解釈せられるものとすれば、類例を加えることは可能である」として、そこでは「泓澄」が新漢音形として解釈出来る可能性を示唆した。音形のみから言えば一致するものであるが、法華懺法の「猛バイ」は文字通りの孤例で、法華懺法中でも同音の「盲」は「バウ」となっており、他の新漢音資料中でも全て「猛」の例のみである。亦、勿論「泓澄」はありふれた漢語ではなく新漢音資料の管見の範囲ではこの漢語は全く出現しないものであって、新漢音との関連は考えにくい。

（注11）築島裕『平安時代語新論』四一一頁以下、拙著『日本漢字音の歴史』一一八頁以下参照。

（注12）明衡往来のこの例については三保忠夫・三保サト子氏『雲州往来・享禄本研究と総索引・本文研究篇』三三一頁注・六八三頁に言及がある。

（注13）『日本国語大辞典』ではこの例を引き、「ワイタイ」の語形は登載されていない。

（注14）『古辞書音義集成』第6巻「字鏡」解説。

（注15）この点については拙著『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』一一五二～一一五四頁に簡単に言及した。

（注16）沖森卓也「世尊寺本字鏡の漢字音について」（『築島裕博士還暦記念国語学論集』）

（注17）築島裕「平安時代の古訓点の語彙の性格―大日経の古訓点を例として―」（『国語学』八十七集）、三保忠夫「蘇悉地羯羅経古点の訓読法」（『国語学』百二集）、月本雅幸「高山寺蔵本文鏡秘府論長寛点」（『高山寺典籍文書の研究』）、同「空海撰述書の古訓点について―その性格と研究の構想―」（『訓点語と訓点資料』七十七輯）、同『六地蔵寺善本叢刊第七巻 文鏡秘府論・解題』など。

（注18）注17引用論文。

（注19）月本雅幸「空海撰述書伝本一覧稿―古訓点研究のために―写本の部㈠」（「白百合女子大学研究紀要」二十一号）参照。

（注20）ちなみに空海に訓点本が有ったことは小林芳規博士が『角筆文献の国語学的研究』五〇頁で論じられ「醍醐寺大日経開題」の「坤吉小」「劫音加」の例が示されている。

〔付記〕本稿の要旨は昭和六十二年十一月三十日広島大学国語国文学会で発表した。その際小林芳規先生に種々御教示を頂戴した。発表後、山本真吾氏に大東急記念文庫本性霊集の用例を御教示頂いた。記して謝意を表す次第である。

（本学教育学部助教授）

《会員近著紹介》

『角筆文献の国語学的研究』

小林芳規著

角筆とは、象牙や竹を細く削って先を尖らせた筆記具であり、紙を凹ませて文字を書く。その角筆をを用いて文字等が書かれた角筆文献は、墨や朱の文字と異なって目立たないため、長い間見過されて来た。その角筆文献の第一号が著者並びに築島裕博士によって発見せられたのは昭和三十六年のことである。以来、著者によって角筆文献の探索と国語学の立場からの研究とが着実に進められて来た。その集大成が本書である。本書の時点までに発見せられた角筆文献は百五十余点に上り、本書刊行以後も続々と発見されている。

著者は、毛筆による文字が「晴」の文字であれば、角筆による文字は「翳」の文字であり、一回的メモ的であると説く。即ち、角筆の文字には、毛筆の文字では現れ難い口頭語や俗語が屢々出現する。また、従来毛筆文献によって中世語であると考えられていた言語事象が、角筆文献では遡って平安時代に出現する場合もある。表記の面でも、漢文の訓点に、毛筆では一般に用いられない女手（平仮名）が角筆では用いられることがある。このように、角筆文献の言語は、これまで知られていた毛筆文献のそれとは性格を異にする点が多く、その詳細な考究を行った本書は、国語史研究上新たな一頁を開く大きな意義を持つ。

著者は更に筆記具としての角筆の起源の探究をも行い、中国大陸において紀元前の紙の発明以前に角筆によって木簡に文字を書いていたらしいことを突きとめ、日本の角筆の源流をそこに求める。また、絵画の下絵に角筆を用いる技法との関連にも言及する。このように、本書は、国語学のみならず、日本の文化史のうえにも一石を投ずるものであると言えよう。

研究篇と影印資料篇との二冊から成る。

《B5判、研究篇一二二頁、影印資料篇 二五四頁。昭和六十二年七月二十八日、汲古書院刊。四八、〇〇〇円》